森の名手・名人シリーズ No.15

名人　問坂　義一（68）　岐阜県大野郡宮村
聞き手　守屋　徹郎　岐阜県立岐阜農林高等学校1年
平成16年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、33名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の『聞き書き甲子園』」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

宮笠作り　貴重な財産

父親と自然 ―どちらも温かく、また厳しい

▲真剣な眼差しで制作に励む問坂さん

1. 宮笠との歩み

笠作りなんかは、学校に行く前から作ったでね。子供でも作れる部分があったでそういうのは子供らで作って…で、家族全員で笠作りをしたんや。年がら年中やるっていうわけじゃなくって農閑期、百姓が終わって11月から3月ごろまで、だいたい5ヶ月間が宮笠を作る1つの大きなシーズンやね。江戸時代から約300年ぐれぇやってたと聞いているけどその時代からずっと副職やったんやねぇ。一番の全盛期は、昭和の20年から30年ぐらいまでやったなぁ。

宮笠の作り方は家族で作っていたもんで、自然にやっているのを見て自分で倣って、特別習ったわけではなく見とるうちにだんだん覚えていったていうことやったなぁ。40年間ほど運送業の仕事をやって、定年になるまでにも笠作りは続けていた。冬は父親と一緒に自分で宮笠を作ったりしとったで、それで、今現在があるんやと思う。

2. 父親の存在

親父のやる姿を動作として全部覚えたって言うことやな。だけど蝉笠（せみがさ）ていう笠の中で非常に難しい技術を使うのは親父に1回だけ教わったことなんかは一度もないね。笠は、全部手作りやもんでね、自分で完璧に作ったつもりでも10個並べてみれば10個が全部違うんやな。それにまぁ、親父の作った笠と比べてみると、まだ子供ぐらいのもんやな。中学校1・2年の時、自分で作った笠を親父に見てもらったら「こんな笠は、売り物にならん」て、ぐしゃぐしゃにもんでまって、ゴミ箱にほかられてまったていうことがあったなぁ。それで、何がじゃぁだめなのかって聞いても親父は絶対教えてはくれなんだな。「そんなものは笠を見よ！」って言って。今思えばまぁそういうことがあって、現在が当然あるんやし、良いものを作って、それで人に喜んでもらうんやで美しく良い笠を心掛けて作っているなぁ。親父は、厳しい厳格な人やったなぁ。誰でも絶対曲がったことは許さない人で、まぁ応用のきかない人やったなぁ。で、笠がまた特に作ることが好きというか、親父の全てに合ったんだと思う。笠に一生執着を持ってやっていたっていう父親やったなぁ。

▼問坂義一さん

3. 宮笠にとって大切な材料

宮笠っていうのは、桧と一位を材料に使っている。今、ホームセンターなんかで売っている笠は同じ桧笠であるが品質が劣る。やっぱ宮笠は全てが手作りやし、他の笠は大量生産を目的にしてるから、一位を使うんじゃなくて染めたものを使ってるわけやな。宮笠は、位山の原生林の中に、一位っていう木が天然木である、それを村から頂いて作ってるんやな。一位には赤色のものがあって、その一位と桧を使って紅白の宮笠を作っているもんで染めた笠とは品質が全然違うもんな。

山から木を切り出すのも手作業なんやな。で、木を切り出す時期は決まっていて、だんだん気温が下がってきて木の葉が、落葉しだすな、木の中では、冬季に向かって渇水し水が下がるわけやね。水が下がった時でないと、切り出して保管しておいた時に材料にカビが入ったり、なにより水分が樹木に多いとどうしてもいい材料にならん。だから、水が渇水して下がった時に、伐採して来年の入梅前までにその材料を「ヒデ」にしておかないといかん。入梅すぎると、ほとんど桧なんかは、虫が入ってしまうんやわ。そして、シラタって言う木材の回りの部分が、みんなカビてまうんやな。また、一位は一昼夜24～5時間釜の中で煮るわけなんわさ。桧は12月に「木材」を切って、5月の下旬から6月までに、一応材料をロータリーに掛けて、そして、乾燥させて完全に腐らなくなれば、その材料は5年も6年もそのまんまの状態で保存できるわけや。まぁ一位で作れば、一位の良さもあるし、桧で作れば、また桧の良さもあるし…。

4. 何故この材料なのか

宮笠作りに材料として桧と一位を使う理由はな、やっぱ桧は、他の針葉樹と比べて、一番、まず弾力性があるっていうか、「やに」とかがほとんどないんやな。だから、編むということについては桧が一番笠には適しているんじゃないかな。一位は、樹木の生えている場所が限られているんやな。だから暖冬の方には、ほとんど無いし、中部圏でもこの飛騨から、以北やけれども、それでもある程度、その原子林ていう一位ばっか林立しているところが、この位山しか、おそらくないんやと思うね。

あと北海道あたりの木は、緯度が高いために、非常に固いっていうのかなぁ、だから材料にはならん。位山系の木が、笠には適しているっていうことやわなぁ。それと赤みおんだ（帯びた）色がついとるもんで、まぁそういうふうに一位は材料にしても、案外粘るっていうか、強度があるもんで使ったんではないかなぁ。材料は、村のほうから材料になりそうな原木を僕が見て、それを分けて頂いて伐採し、自分で煮っするんやれども、材料を選ぶ時の根本としては、やはり節がないこと、そして特に、一位あたりは、中が腐りが入ったり、大きい古木でも、すっと、まっすぐ伸びた木が無いで、その中からいいのを選ぶんやね。

5. 宮笠作りの鍵

宮笠を作るには、ちっとまぁその道具がいるんやな。『はさみ』やろ、『小刀』『しめ棒』このしめ棒で隙間を締めるんや。あと『とうし』で、とうぜん縫うで『はり』たたみ針、ちょっと大きなの…こんなもんかな。材料を笠に仕上げるためには、道具が良くなければ、いい物が出来ん。だから良く切れて、しかも使いやすくて、また能率が上がるっていうもので、小刀が使われたのだと思う。はさみだけでもできんことは無いけど、やっぱ細かいとこや、斜めのとこは綺麗に切ることは、小刀にしか出来ない。僕の道具は、親父の使った物を一部使って、あとは、使いやすくできるように自分で、ちょっと工夫して作っているんやね。

6. 希少なアーチスト

宮笠を作る人は皆に比べてすごく減ったなぁ。昔はだいたい100人ぐらいは、生産してみえてたんやけれども、現在、組合に入って生産している人は、3人しかおらんのやな…だんだん需要がなくなってきたもんな。中国産の笠に結局需要が動いていったんやな、宮笠の3分の1ぐらいの値段だし、宮笠の生産量も昔の10分の1ぐらいやで、とても太刀打ちできんわな。

それに今、宮笠作りの後継者になる人がおらんのやな。仮に若者が今までのものを全部捨てて、宮笠の作り方を習って、後継者となっても、宮笠で収入は1ヶ月作って10万円なし15万円…やっぱ収入に全くめどが立たんのやね、それで後継者になってくれる高校生が出てこんのやわ。だから宮笠は今、危機的状況なわけやね、僕らしか居らんで。材料を作るのも、蝉笠を作るのも、普通の笠なら作る人は居るけれども、蝉笠は僕しか居らんでね。まぁ後継者をなんとか、早急に対応していかんと、もう本当にのうなってしまうもんなぁ…。

▲問坂さんの作品（中央が蝉笠）

7. 飛騨発○○行き

今作っている宮笠の出荷先は、だいたいが、この飛騨地区やな。あと鮎つりの笠にも出してたんやけれども、太公望てか釣り人が本当に少なくなってしまったんやなぁ…。九州とか、京都、岐阜みたいな所、釣りの名所の釣り具屋さんには、ここ10年ぐらい前までは、ずっと出荷しとったんやけれどもね、岐阜も年に200個ぐらいは、いっとったんやけど前年なんかは1件も無かったし、やで鮎釣りの傘なんかは本当に少なくなったわなぁ。他のところへの出荷も農協関係で、販売してもらえるもんで。それで、年間に2500～2600個ぐらい作るなぁ。

8. グリーンツーリズム

グリーンツーリズムっていうのは、この宮村に、お客さんに来て頂いて、そして、自然の体験をしてもらって、帰ってもらうていうものや。その体験ツアーの中で、伝統工芸の宮笠作り体験を教えてるんや。こういう自然の体験をしていただいて、お客様皆様に喜んでいただいてもらって、宮村にもこういった伝統工芸があるんやなっていうことを、1人でも2人にでも関心を持っていただければっていう事を思って講師をやってるわけやなぁ。

9. 問坂さんにとっての宮笠とは

宮笠を作って嬉しかったーとか喜びを感じたことは特には無いんやけど、父親が蝉笠という技術を持っておって、見よう見まねで作れるようになったっていうことは良かったなぁと思っておるわな。それに、仕事をして辛いと思ったことはないね。僕らの時代は、一生懸命に働くっていうことが、生きていく上で大事なことやったから、どんな時でも辛いとか、いややとかそんな風に思ったことは無いし、むしろ、張りがあるっていうか、仕事にぼわれているほうが、充実感があるわねぇ!!　僕にとって宮笠とは、やっぱり伝統工芸なので最後まで残していかないかんっていう気持ちやなぁ。だから親に習ってそれで終わってまっては、僕も心残りやで、最後まで継続できるように技を継承していかなっていう気持ちだな。

▲蝉笠を編んでいる様子

名人　問坂義一（といさかよしかず）さんのプロフィール
●生年月日：昭和11年7月20日生まれ
●出身地：岐阜県大野郡宮村4952
●職業：宮笠作り
60年にわたって宮笠作りに携わっており、現在では無形文化財「宮笠」の管理責任者として伝承に勤めるとともに地域文化の紹介や技術指導に力を注いでいる。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。
【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】